



熱性けいれんとは・・・



乳幼児が急に高熱を出すときに起こす全身のけいれんで、生後6カ月～6歳の乳幼児に特有です。

小児人口の13～30人に1人の割合で起こり、けしてめずらしいことではありません。

乳幼児は、大人の10倍以上もの頻度でけいれんを起こしやすいと言われています。

それは、乳幼児の脳の細胞が未発達で、わずかな刺激にも脳の細胞が興奮してけいれん性の電波を発すること、また、それを抑制する働きも未発達なために、脳の興奮がそのままけいれんとなって現れるためと考えられています。



熱性けいれんの症状



今まで遊んでいた子が急にぐったりとして、全身を震わせ、手足が伸び、黒目は上方に上がり、白目をむいた状態になります。口から泡をふいたり、呼吸を止めてしまったり、唇や顔の色が紫色にかわることもあります。

その後、手と足を一緒に、大きくピクン、ピクンと曲げる様子が見られることもあります。

こんなけいれんが短くて30秒ほど、長いと4～5分続いたあと、力が抜けるように、けいれんがおさまっていきます。

その後は、疲れて眠っている状態になります。

意識がないわけではないので、大きな声で呼んだりつねったりすると目を覚ましますが、じきにまた眠ってしまいます。

寒気によるふるえ(悪寒=おかん)と違うところは、けいれん時に、意識がはっきりしなくなるということです。

ふるえの最中に目でものを追ったり、呼びかけに反応するときは、けいれんとは別の状態といえます。



熱性けいれんの対処法



初めてけいれんを起こしたときにはつい慌ててしまいますが、大声で名前を呼んだり、体を揺すってはいけません。

～慌てずに、よく観察を～

1、衣服を緩めて、平らなところに寝かせ、顔は横向きにします。(吐いたものがつまらない様に。)

2、落ち着いて、けいれんの時間を計りましょう。

3、体の突っ張り方やふるえ方が左右対称かどうかをチェックしましょう。

子どもによくみられる熱性けいれんは、何も特別なことをしたり、薬を使ったりしなくても、数分以内に自然に止まります。

脳に障害をおこすこともありませんし、まして、命に関わるようなことはありません。

一時的に呼吸は止まるがありますが、けいれんが止まれば息を吹き返し、意識も戻ります。

～おさまったら全身状態をチェック～

けいれんがおさまったら、顔色や目の動き、呼吸の様子、手足の状態など、全身状態を確認します。

再発防止のため、薄着にして、わきの下や足のつけ根、首筋などを冷やします。

～救急車が必要な場合は？～

・10分以上けいれんが続く時。 または短い時間の間に、繰り返し痙攣が起きる時。

・けいれんが止まった後も、意識が戻らない時。

・熱がないのにけいれんを起こしたり、最近頭を激しくぶつけたことがある時。

・けいれんが左右どちらかだけだったり、一方からだんだんと広がっていくようなときには至急病院へ。

※これらに該当しない場合でけいれんが治まっていれば、落ち着いて自家用車やタクシーで病院に行きましょう。

熱性けいれんを起こした子どもの3～5人のうち1人が、もう一度けいれんを起こすと言われています。

明日は必ず近くの小児科を受診し、今後熱が出たときの対応についても相談しましょう。

次に高熱が出たときのために、けいれん止めの座薬が処方されたり、場合によっては脳波の検査をしたり、定期的な通院が必要になる場合もあります。

お大事に！